

飛龍山遭難(2014年5月)

64歳単独。飛龍山はどこを下っても巻き道があると思い進むが、見つからない。いつしか残雪は消え、背丈もの濃い熊笹の中に入ってしまった。飛龍山へ戻ることは、しなかったため山中を8日間彷徨うことになった。



解説

頂上からの下りで、方向さえ間違わなければ、巻き道がある。と思い残雪を下る。残雪は巻き道を隠し、濃い熊笹の中へ案内する。おかしいと思った時に、飛龍山まで戻り、地図とコンパスを使用し、下る方向を確認すればよいのだが、道迷いはそれを許さない。携帯も通じない。遭難3日後の夜に、ラジオで自分が遭難しているニュースが流れた。搜索範囲は雲取山方面だったため、自分が救助される確率は少ないと判断し、自力脱出を決意する。地図は持っていた。沢を下っている途中で、ケガをしたため、大常木沢は危険と判断し、西側の斜面を登り返した。なお、後日、救助隊員の方に「大常木沢は、沢登りで何人も亡くなっていて、下るのは無理」と言われた。8日後に自力脱出し、無事に生還した。

遭難中に冷静で有り続けたことが、生還に繋がった。また、単独は孤独感から冷静を失う場合が多いが、ラジオを持っていたことも役だったと著者は分析されている。遭難の原因は、事前にはっきりとした計画を立てず、残雪が多かった誤算を現場対応できなかったことが要因であったが、一番いけなかったのは、「頂上には何人も登山者がいたので、聞けばよかったのですが、『なんとかなる』とナメてしまったのもまずかった」と遭難者は語った。